

日本学術会議健康・スポーツ科学分科会、日本スポーツ体育健康科学学術連合、(一社)日本体育学会 主催



緊急公開シンポジウム2019



我が国におけるスポーツの文化的アイデンティティ再考

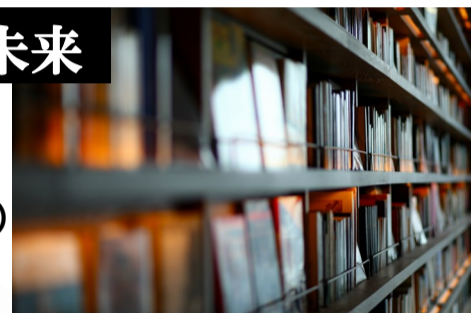
—近年のスポーツ界で生じている様々な諸問題について、学術研究の立場からその本質的原因と改善の方向性を検討し、わが国におけるスポーツの文化的アイデンティティを再確認する—

12:00～ 受付

13:00～ 開会挨拶 田原 淳子 (日本学術会議健康・生活科学委員会健康・スポーツ科学分科会委員長)
深代 千之 (一般社団法人日本体育学会会長)

13:10～ 全体趣旨、スケジュール説明 清水 紀宏 (一般社団法人日本体育学会常務理事)

第1部 博物館とのつながりがもたらすスポーツ文化の未来



13:15～ キーノートレクチャー 「スポーツ文化と博物館資料」
寒川 恒夫 (静岡産業大学、日本学術会議第24期連携会員)

13:45～ シンポジウム
コーディネーター: 来田 享子 (中京大学、日本学術会議第24期連携会員)

■ スポーツ博物館の現場から
「博物館が広げる研究の可能性—国内外の博物館の現状から」
三輪 嘉六 (前九州国立博物館長)

■ 博物館学の観点から
「博物館学からみたスポーツ文化財の可能性」
栗原 祐司 (京都国立博物館)

■ 博物館の教育的利用の観点から
「教育におけるミュージアムの利活用—IOC“The Olympic Museum”の現状とJOCオリンピックミュージアムの挑戦—」
下湯 直樹 (日本オリンピック委員会)

第2部 Sport In Japan: 体育・スポーツの危機と闇に対峙する

15:30～ シンポジウム コーディネーター: 菊 幸一 (筑波大学)

■ 哲学的考察 坂本 拓弥 (筑波大学)

■ 歴史学的考察 鈴木 明哲 (東京学芸大学)

■ 社会学的考察 高峰 修 (明治大学)

17:20～ 全体総括 友添 秀則 (一般社団法人 日本体育学会副会長)

17:30～ 閉会挨拶 阿江 通良 (日本スポーツ体育健康科学学術連合代表)

※各プログラムの趣旨は
裏面をご覧ください

参加に関するご案内

日時: 平成31年1月12日 (土) 13:00～18:00

会場: 日本学術会議講堂

〒106-8555 東京都六本木7-22-34

<http://www.scj.go.jp/ja/other/info.html>

参加費: 無料 定員250名

問合せ・申込先: 次のアドレスに氏名と所属をお知らせください

(一社) 日本体育学会事務局

E-mail taiiku-info@taiiku-gakkai.or.jp



後援: 全国体育系大学学長・学部長会、公益社団法人全国大学体育連合、独立行政法人日本スポーツ振興センター、公益財団法人日本スポーツ協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー、朝日新聞社、スポーツ庁 (申請中)

協力: 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

第1部 博物館とのつながりがもたらすスポーツ文化の未来

日本はスポーツ基本法において、スポーツが世界共通の人類の文化であり、人々の権利であることを謳っている。この基本理念の下、第2期スポーツ基本計画では、スポーツを通じ、人生や社会を変化させ、世界とつながり、より良き未来を創るという4つの基本方針が示されている。

国民一人一人がスポーツのもたらす多様な価値を享受するためには、様々な方法や活動によってスポーツにアクセスする契機をつくり、関心を持続させ、次世代に向け喚起することが欠かせない。これらの方法や活動において、過去のスポーツ関係者たちが残した資料(以下、スポーツ文化財)は、体育やスポーツの歴史的・文化的背景を提供し、厚みを加えてくれる。また、スポーツ文化財は、体育・スポーツのあり方、さらにはそれらが営まれる社会の未来に対する指針を示唆する研究資料でもある。しかしながら、博物館資料を十全に活用した日本国内での研究や教育は発展途上にある。

現在、国内には230を超えるスポーツ関連博物館があるとされている(スポーツ史学会による調査)が、学芸員および司書を配置する総合的な機関は、秩父宮記念スポーツ博物館のみである。同博物館は、1954年の開設以来、スポーツ文化財の収集・保管のナショナル・センターとしての役割を担ってきた。しかし、旧国立競技場の解体に伴い、現在は休館を余儀なくされている。同博物館の近い将来のあり方について、早急に国民的議論がなされることが望まれる。上の問題意識を持ちながら、本シンポジウムでは、スポーツ文化財を所蔵する博物館と体育・スポーツ科学研究・教育のつながりがもたらすスポーツ文化の未来、体育やスポーツが営まれる私たちの社会の未来について考えてみたい。「誰もが自分らしく生きる社会をめざし、世界共通の人類の文化としてのスポーツをどのように引き継いでいくのか」。この問いは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を控えた日本にとって、オリンピック・ムーブメントの理念の観点からも、必要とされるものであろう。

キーノートレクチャー「スポーツ文化と博物館資料」寒川 恒夫(静岡産業大学、日本学術会議第24期連携会員)

シンポジウム コーディネーター: 来田 享子(中京大学、日本学術会議第24期連携会員)

■ スポーツ博物館の現場から

「博物館が広げる研究の可能性-国内外の博物館の現状から」 三輪 嘉六(前九州国立博物館長)

■ 博物館学の観点から

「博物館学からみたスポーツ文化財の可能性」栗原 祐司(京都国立博物館)

■ 博物館の教育的利用の観点から

「教育におけるミュージアムの利活用-IOC“The Olympic Museum”の現状とJOCオリンピックミュージアムの挑戦-」 下湯 直樹(日本オリンピック委員会)

第2部 *Sport In Japan*: 体育・スポーツの危機と闇に対峙する

近年(イマ)のわが国(ココ)のスポーツ界では、常軌を逸した不正行為(パワハラ、セクハラ、猥褻・強姦、暴力、窃盗、薬物等々)が繰り返され、病めるスポーツの姿が露呈している。社会問題化したスポーツ関係者たちの一連の誤りは、現代日本のスポーツが内包する諸特質と諸制度に起因する文化的未成熟性によるものと推察される。

今やスポーツにおける競争は、最先端の科学的知見を応用した「合理性」の追求が勝敗を決する時代に入っている。他方、わが国のスポーツ現実の日常には、未だに時代錯誤も甚だしい「非合理」な伝統的風土が蔓延っている。こうしたコントラストこそが文化のゆがみを象徴しているといえよう。

いかなる人間の創造物(文明、文化)も万能ではあり得ず、常に「裏と表」、「光と影」、「正と負」、「可能性(チャンス)とリスク」の二面性を抱えている。スポーツも例外ではない。未だスポーツは、肯定的な影響と否定的な影響の双方を社会に及ぼし得る不完全な文化である。よって、スポーツを無批判に賛美し受け入れることは、スポーツそのものの文化的成熟を阻害することになる。わが国のスポーツは、多くの鋭い批判に晒されることで、謙虚な自己改造の積みかさねを続けることが今こそ重要であろう。

そこで本シンポジウムでは、「中立性」を旨とする学術の立場から、スポーツの闇に視点を定めることでイマ・ココのスポーツ文化を批判的に捉え直し、リスクを最小限に抑え、チャンスを最大限に引き出すコレカラのスポーツのあり方を検討する。これまでの体育・スポーツ研究はどちらかといえば、スポーツ・運動の効果、長所などに焦点を当て、その「素晴らしさ」を訴求することに重点を置いてきた。このため、スポーツ隆盛の陰に潜む負の側面に関わるデータや知見は非常に少なく、危機と闇に対する感覚は鈍麻していると言わざるを得ない。こうした、体育・スポーツに関わる学術研究のこれまでを内省し、スポーツの真の発展を導きうる学術団体と研究者の今後の方向性についても議論を深める。

シンポジウム コーディネーター: 菊 幸一(筑波大学)

■ 哲学的考察

坂本 拓弥(筑波大学)

■ 歴史学的考察

鈴木 明哲(東京学芸大学)

■ 社会学的考察

高峰 修(明治大学)